パネルディスカッション「TACE での抗癌剤の使い分け」

司会：宮山　士朗　先生（福井県済生会病院放射線科）
　　松岡　俊一　先生（日本大学医学部消化器肝臓内科）

【司会の言葉】
肝動脈化学塞栓療法(TACE)は手術不能進行肝細胞癌に対し広く行われている治療法であるが、登場から 40 年余りが過ぎた現在でも抗癌剤の必要性は証明されていない。また抗癌剤の種類による治療効果の差異を示すエビデンスレベルの高い報告もなく、最適な薬剤の組み合わせや投与量、変更のタイミングも明かにされていない。しかし、実際の臨床では日常的に抗癌剤が使用され、また抗癌剤や併用する塞栓物質の種類により治療効果や副作用に差があることもしばしば経験する。塞栓物質に薬剤のロード・除放を容易にする drug eluting beads（DEB）が登場し約 5 年が経過した。ロードされた抗癌剤（ドキソルビシン）が腫瘍内に 高濃度に残り末梢血に流出しないことが薬物動態学的にも証明され、副作用が少なく治療効果の高い治療法であるとの短期成績が出ている。しかし従来の Lip-TACE との有意差は証明されていない。現在主に C-TACE、B-TACE、DEB-TACE が行われているが、本パネルディスカッションでは各施設で行われている TACE で使用される抗癌剤の使い分けについて発表していただき、最適な使いわけや薬剤変更のタイミングについても議論したいと考えている。多くの演題の応募を期待する。